

私はおじさんにとって、取るに足らない女なのだということを自覚させられ、涙をこぼさんばかりに歩き、ほんのりと温かいケバブをもって、どこかにいなくてはいならないという苦痛が私にはどうしても耐えられない。何千万人もいるおじさんの女の中の、さらに取るに足りないひとり。そして日は沈み、明日がやってくる。明日がやってくるにもかかわらずケバブスタンドは相変わらずそこに立ち続けていて、私がのぞけば別におじさんはまたその応酬をはじめだろうことは明白なのに、私はどうすることもできず、ちょっと筋肉をこわばらせながら、そして精神もそれに連動させながら、そしてそのせいで精神科にも通いながら、表面だけでは礼儀正しい女を演じつつ、しかしながら私はどうしようもないおじさんに対する鬱屈を抱えており、私の女としての自信や女としての誇りなど、女として存在している以上はそこまで深く考えなくても別にいい問題を、私はくよくよと悩み続け、私の中から律儀に流れ出るところとしたチリソースとの和解を試みながら、私は明日を生きなくてはならないなんて何て不幸なんだ！ と考えきることもできず、私は明日を生きていくわけだが、しかし私はあのケバブスタンドを見る度このことを思い出してしまうだろうとは思う。

ケバブ・女Ⅱ愉快あまりチリソース